

〈対談〉

写真集のクオリティを高める印刷技術



高柳 昇 (株式会社 東京印書館 執行役員 統括ディレクター/プリンティングディレクター)

熊切圭介 (写真家、日本写真家協会 副会長)

平成25年 1月11日 於：JPS会議室

写真家の表現をいかにして写真集へと仕上げるか、高柳さんの印刷方法とコミュニケーションの重要性について、写真集を見ながら対談していただきました。

熊切 高柳さんは現在、東京印書館の統括ディレクターとして活躍なさっているんですが、最近の写真集で高柳さんのお名前をお見かけしないことはないくらいプリンティングディレクターの第一人者として仕事をなさっていますね。そのきっかけは何でしょうか。

高柳 当社は私以前に専従職のプリンティングディレクターはおりませんでした。業界でも当時、大手の印刷会社さんに数名いらっしゃる程度で、そういう職種があることすら知りませんでした。新入社員は専門知識を身につけるため全ての職種が工場を一度経験すると決まっており、私も営業職採用でしたが2年間の予定で工場勤務の製版部に入りましたが、なぜか35年そのまま製版で。(笑)

熊切 高柳さんがディレクターとして関わるのは写真家個人の場合と出版社の場合と両方あるんですか。

高柳 そうです。基本的に写真家さんから東京印書館の高柳と指名がある場合やデザイナーさんのご紹介、編集の方のお願いの3者があります。お陰さまで写真家の皆様については殆どリピーターになっていただいています。

年間50～60冊携わる

熊切 今までどれぐらいの写真家、あるいは写真集に関わってきましたか。

高柳 32歳からこの仕事をしています。10年間は製版部で当時は花形機のスキャナーで色分解をしておりました。当時の製版は4版に分版して手作業で集版していました。積極的に写真集を受注させて

いただく内部プロジェクトが去年で10年になりましたが、当初は年間30冊、現在は年間50～60冊の写真集を受注いただいております。

熊切 東京印書館で印刷部分は高柳さんにやってほしいという方が増えているのですか。

高柳 お陰様で増えております。私どもは「標準が高品質」の印刷会社を目指そうと、写真集以外にも月刊誌や絵本、カレンダーなどの写真集以外の印刷物も高品質を目指すスローガンで会社を挙げて取り組んでいます。

熊切 実際の仕事を進める場合、写真家が製版の現場に立ち会いますよね。

高柳 印刷立会いは玉川工場(東武東上線森林公園駅)の印刷工場です。製版は埼玉県南部の朝霞台になり営業所は東京の音羽になります。データ関係はインフラ整備が進んでいますから、皆様のお役に立ち易い音羽営業所で色は制御出来ます。入稿時点で写真家や編集者、デザイナーの方と我々を含めて写真集の方向性を打ち合わせします。それに基づいて初校を出して意思を疎通していただき赤字が入ります。赤字については音羽ですぐ画像の確認をしていただき場合によっては画像調整もすぐ出来ます。皆様のご要望(赤字)に基づきリアルタイムで色調(画像)調整をすることが安心ではないでしょうか。

デフォルメ、感性

熊切 最初の関係者が集まったの打ち合わせが大事ですね。

高柳 大事です。印刷の場合、用紙や写真原稿の種別により印刷仕上がりが変わってしまいます。

例えば用紙の差によって色の出方が変わりますし、RGBデータとC、M、Y、K(BL) 演色領域の差があります。出せる色の領域がデ

デジタルカメラのRGB発色(光の三原色)の大きさと、印刷のC、M、Y、K (BL) 発色(色の三原色+墨)では大きく異なり、印刷での表現域がかなり狭くなります。さらに透過原稿のフィルムの色の濃度やモノクロプリントの濃度は、印刷インクより間違いに高いです。

そういう意味で「プリントどおり」「カラーどおり」には物理的に印刷では無理で、どこかをデフォルメして「雰囲気カラーどおり」に仕上げていることになります。例えば明部と暗部の調子を全部再現しようと思ったら、印刷物はとてもフラットで弱い印象になります。ですから、どこかをデフォルメしないとダメです。また、写真家さんの要望(ボリュームアップ、明るく等)もあります。そこを印刷時に再現するため、先ずは入稿会議からスタートします。

熊切 なるほど。写真家が用紙にこだわる場合、何種類かテストプリントをするのですか。

高柳 当然用紙テストを兼ねて本紙校正をします。人間の感性が入らない印刷にとってよい紙とは、用紙白色度、色相と用紙の平滑度で決まります。紙は白ければ白ほど色の再現性がよく、色がきれいに仕上がります。紙の平滑度が高ければ網点の形がきれいで、用紙表面の凹凸にインクの層が負けず、印刷もシャープに上がります。要するに用紙は真っ白でツルツルな紙ほどよいわけです。でも人間は感性がありますから、紙が硬い、光って見づらい、色が派手に出過ぎる、紙に柔らかさがないと感じます。紙が白ければ白いほうがよくてツルツルがいいとなれば皆機械的な紙になりますが、和紙の手触り感に近い印刷物も必要だと思うんですよ。

熊切 現在、本はデジタル機器でも読めてしまっていますが、本の場合はページをめくったときの紙の感触が内容と一緒に伝わってくるわけですね。

高柳 私なんかはインクのおいさがブーンとするとすごくいいですよ。新しい印刷物はインクのおいさがしますからね。(笑)印刷仕上がりに、ある種の雰囲気を出すためには用紙の持つ表現力も重要です。写真、製版、印刷、用紙のコラボレーションですか、写真集には用紙選びも大切です。またインクの問題では、特にダブルトーン(墨+グレイ)のモノクロ表現の写真集でしたら、銀塩モノクロプリント原稿と比べて印刷インクでは3分の2程度の濃度しか持っていないのでオフセット印刷の墨版インクでは眠い印刷しかできないわけです。モノクロ表現の写真集については、写真集用の濃い濃度の墨インクとグレイインクのダブルトーンで出来る限りプリント原稿に濃度を近づけ、原稿の階調を再現するようにします。写真集用墨インクは数種類、グレイインクは暖色系、寒色系、ニュートラルグレイ系は、かなりの数を用意して、写真家の皆様の要望に応えようとしています。

熊切 印刷段階で写真家の立会いはどのようにやりますか。

高柳 責紙を印刷時の調子見本として印刷するわけですが、印刷にはインクの乾燥工程(大よそ48時間)でドライダウン(乾燥後のインク濃度の低下)が起きます。ドライダウンの程度はインク盛り(転移量)や用紙の平滑度によっても異なりますが、必ず起きます。そのあたりを立会い者に出来るだけ丁寧に説明致します。特に微塗工紙のような平滑度の粗い場合はドライダウンの程度が高いため、場合によっては印刷物を10分程度乾燥させて急激なドライダウンを確認します。またオフセット印刷は同じ版でもインクの

盛り(転移量)を増減することが出来ます。これは、印刷仕上がりを濃くも薄くも出来るわけですが、印刷表現に関わってきますので重要です。インクを盛ればボリューム感が出ますが、印刷に濁りを感じたり、暗部の階調がつぶれ易くなります。このあたりも説明し、実際、印刷時に確認していただき、落としどころを決めます。ですから1台目の印刷は特に慎重に、また多少の時間をかけて行います。理想的には責紙も良いが、本機印刷は更に良いが目標です。**熊切** 印刷に詳しい写真家の場合、複数の印刷機があると「俺は1号機じゃないとダメだ」とかあるでしょう。

高柳 印刷機サイズの違いや印刷機の個性差もありますし、印刷会社としても写真集を印刷する機械は精度が高いですが、「俺はこの機械が好きだよ」というのは多分あるのでしょうか。(笑)

熊切 印刷技術はかなり進歩していると思いますが、よかれと思って新しいシステムでやったのに写真家が気に入らないといった例はありますか。

高柳 新しいシステムが気に入らないというのは記憶ありませんが、デジタルの発色が嫌いだから、フィルムのような色味にして欲しいとか、デジタルはシャープ過ぎるからフィルムのようにして欲しいとかは割とあります。(笑)新しいシステムということであれば、オフセット印刷でもFMスクリーンとかハイブリッドだとか、同業他社で細かい線数をやっているところは700線とか最高1000線にトライしているところもあるらしいですが、私どもはフェアドットのハイブリッド網点と、あとはAMスクリーンで250線、細かくても300線ぐらいまでです。インクが盛れますからいちばんボリューム感があり使っております。特にモノクロプリント原稿は印刷のインクとの濃度差が気になりますから強く盛りたいのです。あまり線数が細くないほうが盛りやすいので、その辺を私どもの落としどころにしています。

熊切 実際に試しに印刷して写真家に見せて「いや、もうちょっと濃度を上げて」というような微妙なやり取りは重要ですね。

高柳 先程も言いましたが、特に最初の1台目は重要です。時間をかけて慎重に考えてくださいと申し上げます。それによってほぼ写真集の表情が決まります。

本橋成一 写真集『上野駅の幕間』

熊切 一番最近関わられたのは本橋さんの『上野駅の幕間』ですか。白黒写真のよさが十分に表現されていて、本橋さんが狙ったような写真集になっていますね。上野駅というシチュエーション。その



高柳さんがディレクションした写真集の一部

中で生きる人間の感じが印刷でうらやましいぐらいによく出ているなあと。再版で新しくなっていますが本橋さんから細かい注文はあったのですか。

高柳 本橋先生は、「暗部は潰さずに出来る限り暗部もしめてボリューム感を出してくれ」というご注文が多いです。細かいディテールはこの暗い電車の車輪も、ほのかに全部出してあるんです。人がある程度背景から浮き立つような製版をしています。今は全て製版工場の内部、あるいは印刷のPS版のところまでデジタル処理ですから、焼き込みや覆い焼きは製版の段階でできるのです。極端に言えば背景と人物は別処理をします。

熊切 適度のコントラストがあって、柔らかい調子でバックの暗い中にも人間の輪郭がきれいに浮き上がっていますね。本橋さんの感想はありましたか。

高柳 狙いどおりの写真集だとお礼の電話をいただきました。カバーも本文とは製版を変えています。マットPPをしても沈まないように、同じ写真を使っていますが違うデータをつくって製版をつくり直してあります。



高柳 昇さん

熊切 僕の家は上野駅に近くて小学生の頃の集団疎開以来、よく出入りしていて、本橋さんから写真集をいただいた時に自分が写っているんじゃないかと思わず探してしまいました。写っている人間のリアリティが、印刷でみごとに表現されていると思います。

高柳 ありがとうございます。一応私もそれを狙わせてもらって、そういうふうには製版したつもりです。

江成常夫 写真集『鬼哭の島』

高柳 この『鬼哭の島』は江成先生のご要望が「モノクロ写真もカラーも魂が慟哭しているような強い印刷物にしてほしい」ということでした。最初は表面がカラーで裏面がモノクロのダブルトーンの予定でしたが、構成上無理だということでカラー面の中にモノクロ写真を入れることになりました。簡単なのは4色+2色にして、カラー写真を4色モノクロ写真を裏面と同様の墨版とグレイ版のダブルトーンにすれば裏面と表面のモノクロ写真の調子がそろいますが、コストの面でカラー4色でダブルトーンの2色と色を合わせました。説明しなければどこが4色モノクロ写真でどこがダブルトーンかモノクロなのかはわからないと思うんですが。

熊切 わからないですね。全体としてはカラーだけ目立っても、モノクロだけ目立っても困るバランスが難しいんでしょう。

高柳 そうなんです。カラーのほうは、墨、藍、赤、黄のインクが4層乗っていますが、ダブルのモノクロのほうは墨とグレイの2層です。4層乗るとワックス層が厚くなりグロスが出ます。ところが2色のところはグロスが出にくいですから、グレイインクに超光沢メジウムと光沢ニスを使ってグロス感、光沢感がほほそろうようにしてあります。それが一番の苦勞と工夫したところなんです。カラーでセピア調を出すのと、ダブルで出すのは結構難しかったです。

森山大道 写真集『NAGISA』

高柳 森山先生の最近の写真集はほぼ私がやらせてもらっているのですが、基本的に初校責です。潰さずに思い切り暗部は強くしてグラビア印刷のようなコクを出してくれというのがほとんどです。グラビア印刷の墨インクというのは1色でもすごく濃度がありますが、それをオフセット印刷で出してくれというのが要望です。

熊切 写真集の意図した内容に合った印刷ということでしょうね。

高柳 はい。モノクロ写真集は通常、墨版とグレイ版のダブルトーン2色ですが、森山先生のは、暗部濃度を強く出すためほとんど墨と墨で刷っているのです。ですから同じダブルトーンでも本橋先生の写真集とは製版の仕方は全く違います。

熊切 写真家が何を要求しているかも深く探らなくてはならないから大変ですね。

高柳 そうですね。私が関わるのは通常製版からですから編集の方々が前段階からうまくコーディネートしてくれる部分も多々あります。編集の方はながく写真家さんとお付き合いされているから「先生が言いたいのは恐らくこういうことだと思うよ」と私が悩んだときには教えてもらう場合もあります。

熊切 多くの場合、編集者は前からの森山さんの作品を系列的に見ているわけだから、森山作品はこういうのだという思いがまた編集者にもありますよね。それを印刷でどう活かしてもらえるかということでしょうね。

須田一政 写真集『風姿花伝』

熊切 須田さんの写真集『風姿花伝』はどうでしょう。全体的な感じが暖色系なんですよ。

高柳 ええ。暖色系にしてなおかつ結構シャープなんです。そのシャープさをいかに出すかということです。

熊切 原稿は6×6ですよ。

高柳 そうです。これはもちろんモノクロプリント、銀塩のプリント原稿なんですけど、暗部ディテールを潰さずに出来る限り強いイメージです。

熊切 紙が暖色系なのは最初からの希望ですか。

高柳 そうです。写真面からいけばやっぱり白いほうが、コントラストがはえるんですが白すぎても硬くなるのががちり盛ってます。これも雲だけ別処理してボリュームを強くしています。老夫婦も背景から浮き立つようにしてあります。写真家さんに一番お願いしたいのは、こうしたいとはっきり言ってもらえると助かります。「この写真はこういう方向で」「暗部については潰れてもいい」とか自分がこういう印刷にしたいというのをお話しいただけると一番近道になります。製版設計で最も重要なことですから。

熊切 なるほどね。遠慮しないで主張したいことは言ったほうがいいということですね。

石元泰博 写真集『両界曼荼羅』『桂離宮』

熊切 高柳さんの仕事の中では石元さんの作品は非常に大きな部分を占めていますよね。『両界曼荼羅』については、色が既に退色しているものをどうするんですか。

高柳 原稿は40年以上前のエタクロームですから全部退色しています。まずフィルムですからスキヤニングをするのですが、退色補正のAI機能がスキヤナーについている程度退色補正がされます。透過原稿からスキャンした最初のデータはCMYKで演色領域という表現できる色(面積)が少ないですから、それを一度16ビットのRGBに置きかえ退色補正処理して、更にもう一度CMYKに変換します。その時に紙ですとか写真家さん、デザイナーさん、編集者の要望に合わせてもう一度色調整します。それでここまでの退色補正が出来ています。およそ35年前に私どもの兄弟会社の平凡社で写真集をつくっているのをそれをターゲットにして合わせ込みました。

熊切 そういう面では退色の問題があるけれど、やっぱりいい印刷物で残すということが非常に大事ですね。

高柳 そうですね。私ごときが言うことではないですが、著作権は写真家個人に帰属していると思いますがある意味こういうものは国の宝なわけですから、いろいろな写真家さんの写真をデジタルデータでいいですから、公共機関がしっかりアーカイブをつくるべきだと思います。これはフィルム自体が直っているわけではないんですよ。データが直っているわけですから。石元先生の写真は高知県立美術館へ全部入っていますが、やはりどこかで公共機関が日本の写真文化ですから残してほしいと思います。

この退色補正をした時には石元先生はご存命中で最後の写真集になるのですが、原稿は退色が進み写真集にするのは無理だと諦めていたそうです。その原稿からテスト的に退色補正をし、補正結果をインクジェット校正刷をご覧いただいて納得していただきました。結果、まだこの原稿は使えるなということで約200点退色補正をやりました。この『両界曼荼羅』は200点以上の写真をスキヤニングして、さっき言ったようにスキヤナーのAI機能で補正し、RGBに変換して再度補正し、さらにもう一度CMYKに変換して補正して仕上げますから3回画像を修正しているわけです。

熊切 それは大変だ。そのおかげでこういう形でちゃんと残るんですからね。お金もかかるだろうし国や公的機関で、保存するようにすればいいですね。石元さんについて言えばモノクロの『桂離宮』がありますが、石元さんは出来上がりに非常に厳しいでしょう。

高柳 晩年8年ぐらいのものは全部私がやらせてもらいましたが、作品からも厳しさが伝わってくるプリントです。1つのカットでも最低5枚ぐらいは同じネガから露光を変えて焼きますから、そういう意味では厳しい先生ですけど、意気込みが伝わり、やりがいといいますか応えようという気持ちになります。

この写真集は墨版と硬調墨版とグレイ版のトリプルトーンとニス版です。写真に写っている苔も、もうこの状態じゃないそうです。踏石も歩いたりして大分摩耗したり。なおのこと残しておかなければと思いました。



熊切圭介副会長

熊切 1冊の写真集でも、文化的な意義を考えると、きちっとやらなければいけない部分ですね。

高柳 写真集は最低でも数冊、あるいは数十冊が100年後でも200年後でも残っている可能性が高いですね。

熊切 大事なものは本当にいい印刷で残す。それが一番いい方法だと言われていますよね。

コミュニケーションが重要

高柳 写真家さんがシャッターを切るというのは、アナログ感性で感じる部分じゃないですか。それ以降はデジカメで撮れば現像処理からデジタル工程で、製版もデジタルで入りますが「ここを全体にボリュームをつけよう」とか「もっと明るくしよう」とかアナログで確認して、最後の評価もまた「あ、この印刷いいじゃない」とアナログになるんですね。中間工程は全てデジタルですが、最初と最後はアナログなのでコミュニケーションがすごく重要だと思います。やはり感性の領域は緊密なコミュニケーションしか無いと思います。

熊切 そうですね。高柳さんがこの写真集、この仕事は非常に強い印象が残っているという例について触れていただけますか。

高柳 この仕事を本気で取り組もうと思ったのが22歳です。営業職採用ですから、製版は、気持ち的には腰かけでしたが、よその印刷会社の立派な上製本のお厚いお茶室の写真集を見まして、暗い中に兩上がりでサザンカの葉の先から今にもしずくが垂れそうな、お茶室の庭の写真を見たのです。「印刷ってこんなにすごいんだ。これは本気で取り組まないといかんな」と思ったのがきっかけです。

プリンティングディレクターは黒子ですので、自分の好きな製版方法や好きな色の出し方というのはありますが極力前に出しません。経験値は話しますが、よく聴くことから始まります。当社の印刷物の特徴は印刷濃度が高いことだと思います。モノクロ写真でいえばモノクロプリントに匹敵する濃さであったりボリューム感であったり。印刷インクは標準的な印刷では3分の2の濃度しか持てませんから、立体感や遠近感が不足しがちです。どこまで印刷の濁りを感じずに、インクを盛り込むか。そのためにはどのような製版をするのかというのを飽きずに(笑)25年ぐらいやっています。

熊切 最後に、まずテーマや写真そのものがよくなってはどうしようもないんですが、いい写真集をつくりたい、これからつくりたいと思っている人にアドバイスをお願いします。

高柳 プロフェッショナルの写真家、ハイアマチュアの写真家まで、いろいろな写真集をやらせてもらっていますが、ピント、解像度等、物理的な条件を除けば、「こういう写真集にしたい。こういう色を出してほしい」というイメージを持っていただきたいです。また、それを伝えるためのコミュニケーションが重要だと思います。一般的な印刷物も写真集も製作工程は全く変わりません。その同じ工程の中でクオリティーを上げるには、良い意味でのこだわりとコミュニケーションが必要です。そのほうが無用な出費も抑えられます。(笑) 関係者全員で知恵を出すことが大切です。

熊切 本日は貴重な話を色々ありがとうございました。

(構成/小野吉彦、撮影/飯塚明夫)